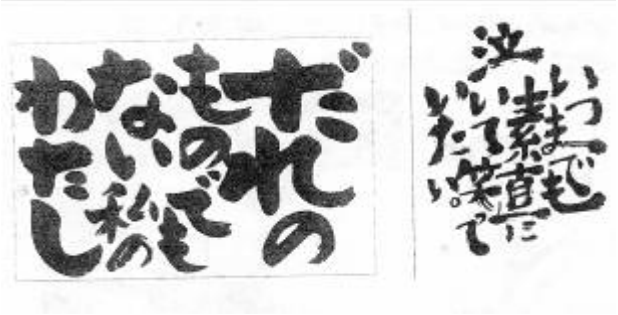
HARRY'S 資料文献コーナー

針谷　正紀

「書で自己表現ー自分と向き合う高校生たち」

須田章七郎著

「授業の主人公は生徒であり、授業は創造的かつ楽しくなければならない」という基本的視点に貫かれた須田章七郎さんの著書を、著者の地元の情報誌、Ｗｅｂタイムス笠懸（編集委員代表武田勝さん）の書評記事から転載し紹介します。記事は一部修正させていただきました。



笠懸町在住の高校教師　須田章七郎さん（前橋南高校勤務）の書道授業の実践をまとめた本が大月書店から出版されました。

須田さんは書道教師として教職に就いてから２０代の半ばまで、臨書（古典などの手本通りに書く）中心の授業をしてきましたが、その授業形態に疑問を抱くようになり、以来「手本通りに書く『書』から、自分の思いを表現する『書』へ」転換を図るようになりました。

そのきっかけになったのは、ある日の書道の授業で「美術、音楽、書道のうちもっとも芸術性が高いのはどれ？」と生徒に問うたところ、書道と答えた生徒がゼロだったことでした。生徒にとって「創造性」が感じられない授業ではだめだと悩んでいるときに、教育研究会の場で出会った滋賀県の教師の「どうして５０歳や６０歳の人が書いた文字を手本にして１６歳や１７歳の子が書かなければいけないのか、もっと自分の字を書いたらいいではないか。」という言葉に触発され、「書で自己を表現する」「書で人間を育てる」実践に足を踏み出しました。

本書はその実践の集大成といえるもので、生徒の作品編と須田さんの指導技術・実践編とで構成されています。作品編「書で自己表現」は全１２８ページのおよそ６割にあたる７６ページを占め、「自我像」「自分を見つめる」「詩文」「高校生活」「人間・共同制作」「現代社会」「修学旅行」というテーマに沿って書かれた生徒の作品が並びます。どの言葉も他人の言葉でなく、自分の心と向き合って出てきたもので、それをひたむきに書で表そうとしています。そこには魂の叫びともいえる迫力があり、見る者を圧倒します。語られる言葉と書の表現が、作者の心に思いをはせさせ、深い感動を呼び起こします。

後半の技術・実践編「自己表現のための書に取り組む」では、まず基礎基本の授業の様子が書かれており、「お手本」のない授業ではあるが、「自己表現」をするための筆使いの基本はしっかりと教えられていることが分かります。従来の臨書の授業とは全く異なり、これを読んで戸惑う人も予想されますが、非常に説得力があり、新鮮です。

「テーマを設定した書の授業」では、テーマに沿って指導過程が述べられています。作品編で示された生徒の作品がどんな過程を経て完成までにいたったのか、その背景も語られます。読み進めるうちに「こんな授業を受けてみたい」という気持ちが湧いてきます。

須田さんの１年間の授業の締めくくりは生徒の作品展です。市内のデパートなどの会場を借りて、生徒全員の作品を一般公開します。目標は、①父母に見てもらうことによって親子のつながりをつくる、②市民に見てもらうことによって、地域に根ざした学校とする、③授業実践の総括の場とする、というものです。会場いっぱいに並べられた大きな生の作品からは、若者たちの心が痛いほど伝わってきます。本書の中で、「作品の前にじっと立ち、涙を流す父母がいる」との記述がありますが、そのことが実感となって迫ってきます。

本書に関する問い合わせはぐんま教育文化フォーラムまで